

# 海外生活 エッセー

パリ事務所

## 古いものを愛するフランスの「蚤の市」文化

(一財) 自治体国際化協会 パリ事務所 所長補佐 辻 歌織 (愛知県派遣)

週末のパリの街を散歩していると、頻りに目にするのが蚤の市です。少しディープな雰囲気ですが、一度足を踏み入れてみると、見たこともないような歴史あふれる骨董品に出会うことができます。今回は、そんなパリの蚤の市文化についてご紹介します。

### → パリの蚤の市

蚤の市とは、入手困難な古いものを見つけるための市場を指します。この多くは常設で、週末限定で営業することが一般的です。パリではこれら常設の蚤の市のほか、広場や通りを封鎖して行われる期間限定の市が、週末ごとに市内のあちこちで開催されています。これらには、プロの古物商のみが出展する「ブロカント」や、地元の人が不用品を持ち寄る「ヴィド・グルニエ」という区別があり、アンティーク家具から日用品までさまざまな商品を目当てに、地元の人から観光客まで多くの人でにぎわいます。



ブロカントの様子

### → 蚤の市の起源

「蚤の市 (Marché aux puces)」はフランス語が語源です。その始まりには諸説ありますが、19世紀半ばにパリの商人たちが政府機関、軍事施設、病院などから古着を買い集め、それらを加工、改造して再販売したことがルーツと言われています<sup>1</sup>。当時は既製服がまだ存在しなかった産業革命の真っ只中で、パリの労働者階級の貧困は深刻化しており、より安価に衣服を手に入れたというニーズがありました。山積みされた古着を見た



パリ最古・最大の蚤の市「サン・トゥアン蚤の市」

人々が「蚤が湧いていそうだ」と形容したことから、この名が定着したと伝えられています。

### → 若者の倫理的選択として

蚤の市にいる人を観察すると、年齢層はさまざまですが、特に若者の姿が目立ちます。ヨーロッパでは若年層を中心に大量消費文化への見直しが進んでおり、「ものを中古で買う」ということが環境に配慮した倫理的な選択として浸透しています。そのため、蚤の市での買い物がごく自然なこととして受け入れられているように感じます。また、市場価格よりも安く手に入るため、日用品など必需品の買い物にも賢く利用されています。

### → フランス人と蚤の市

フランスでは年間5万以上の蚤の市やヴィド・グルニエなどの催しものが開かれ、人口の30%が年に数回はこれらの場所を訪れているというデータもあります<sup>2</sup>。週末の朝に足を運び、そこでしか出会えない一点物を見つけるプロセスは一種の「宝探し」のような感覚を味わうことができます。手に取るものの歴史を愛し、他人とは違う「特別さ」を大切にフランス人だからこそ、蚤の市文化がここまで発展したことにも深く頷けます。

- 1 <https://www.timeout.fr/paris/le-blog/petite-lecondhistoire-dou-viennent-nos-marches-aux-puces>
- 2 <https://www.radiofrance.fr/franceinter/podcasts/les-francais-mode-d-emploi/les-francais-mode-d-emploi-du-jeudi-19-septembre-2024-4803261>